



史蹟史料部

2025 年 8 月 29 日

#73

日本人墓地公園 ニュースレター

ながのさねよし 長野實義の墓と碑

日本人墓地公園の門を入ると、フラワーアーチの手前の右側に「長野實義君之碑」と書かれた大きな石碑と2つの墓があります。

これは大和商会創設者、長野實義の業績をたたえた碑で、その囲いの中に、この夫妻の墓石があります。實義は51才（1915年）、妻の登米子は43才（夫の没後1年）で他界しています。

實義は同文書院に学び、1898年にシンガポールに渡り、夫人と力を合わせ事業を成功させました。



實義は1901年11月にシンガポール初の農務省実業練習生になり、後に大和商会を継承しました。1903～1904年に行われた外務省の「海外日本実業者の調査」では、シンガポールにあった有力商店の1つとして大和商会（長野實義、水野初太郎）の名が挙げられています。

1909年5月、[ニュースレター#14](#)でご紹介した中野光三医師らが主導し、日本人青年会が結成されました。1910年5月8日、英国植民地政から許可を得られず幻となった日本人会成立時には、實義は副会長に選ばれました。

また当時増え始めていた日本語の出版物のうちの1つであった『南洋自由評林』に掲載されたシンガポール在留邦人の人気投票の第1回目では、實義と三井物産の林徳太郎が最高得点を獲得していたという記録があります。

實義の危篤の知らせには、[ニュースレター#52](#)でご紹介した西村竹四郎医師が軍医総監や英国人医師を招いて懸命に治療しましたが、1915年8月2日に息を引き取りました。日本人相手の邦商が多い中、實義はヨーロッパ人顧客を独占するほど、大和商会は巷間に知られた店でした。

長野實義君之碑



君ハ慶應元年八月十五日鹿児島県種子島ニ生ル弱冠東都ニ学
ヒ同文書院生トナリ研鑽スル所多シ日清ノ訳通譚官トシテ従
軍シ頗ル功アリ爾後南方ニ志ニ臺灣ニ入り明治三十一年新嘉
坡ニ渡リ大和商会ヲ起シ蹟ノ見ル可キ者アリ然ルニ大正四年
八月二日病ヲ得テ終ニ逝ク行年五十一歳君平素老西郷の詩

才子元来多誤事 議論必竟世無用
誰知黙々不言理 山是青々花是紅

ヲ愛吟セリ以テ君ノ性行ヲ知ルニ足ラン

（あなたは慶應元年8月15日に鹿児島県の種子島で生まれ、若いころに東京で学び、同文書院の学生として多くの学問を深く究め、着実に研究を積みました。日清戦争では通訳官として従軍し、大いに功績を上げました。その後、南方に志を持ち、台湾に渡り、明治31年にはシンガポールに移住して大和商会を創設しました。その足跡は今でも見ることができます。しかし、大正4年8月2日に病に倒れ亡くなりました。享年51歳。あなたは生前、西郷隆盛の詩を好んでいました。

「才能がある人はもともと失敗が多いものだ。議論というのは、結局のところ世の中の役には立たない。黙って何も言わないことにも、実は深い道理があることを、誰が理解できようか。山はどこまでも青々とし、その中で花は鮮やかに紅く咲いている。違いがあるからこそ、お互いが成せる。」

この詩を好んで吟じていたことを見れば、あなたの人となりがよく伝わってきます。）

この碑は 1916 年に建てられました。

撰文は海軍中将 野間口兼雄（後の横須賀鎮守府司令官）、書は西村竹四郎によるものです。

西村竹四郎が自身の本『在南三十五年』に「日本人墓地は僕の書展」とあるように、彼の書の一つです。



妻の登米子は若い頃、中国で日本軍の密偵として、文字通り死線をくぐり抜け、シンガポールに来て實義と再婚しました。結婚後、夫の許可を得て、ゴールド・ラッシュの波に乗り、単身オーストラリアの砂漠の奥地に砂金を求め、日射病に倒れ、人事不省のまま数日後に発見され、病院に運ばれて、九死に一生を得ています。

その後はよく實義を助け、その奇才と企業家精神をもって、異国の困難な事業を成功に導きました。また、イギリス政府高官らとも好関係を樹立して、邦人の違反事件などの解決にも尽くしました。彼女は、国際社会の中で、まれに見る優れた存在でしたが、實義の逝去後わずか 1 年にして、43 才の若さで生涯を閉じました。

参考文献：

「シンガポール日本人墓地公園 - 写真と記録 改訂版 -」シンガポール日本人会 史蹟史料部 1993 年改訂版発行
「シンガポール日本人社会百年史 - 星月夜の耀 -」シンガポール日本人会 2016 年 12 月 23 日発行